

機関番号：15201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520328

研究課題名（和文）石刻復元資料による柳宗元を中心とした唐代文学の文理融合型研究

研究課題名（英文）Research of literature in the *T'ang*, with a focus on *Liu Zongyuan* : based on restored stone carving materials by a method that combines arts and sciences

研究代表者

戸崎 哲彦 (TOSAKI TETSUHIKO)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：40183876

研究成果の概要（和文）：唐代文学について従来は今日に伝わる個人の詩文集を主に用いて研究されて来たが、テキストによって異同があり、かつ伝わっていない作品も少なくない。本研究では石刻に基づいて収録されていると思われる歴代の方志等の文献および現存する石刻資料の現地調査とそれらの画像処理等による復元という手法を駆使し、具体的には著名な柳宗元を対象として選定し、本文の校勘、佚文、真偽、書法等に及んで実証的研究を行ない、石刻資料による研究モデルを示した。

研究成果の概要（英文）：*T'ang* literature has mainly been studied using a collection of individual works handed down to today. However, there are a lot of variant of characters in different editions, and some pieces have been lost. This study attempts to research three different types of records: inspection of historical and geographical books, field studies, digital image processing of stone carving materials. Specifically I intended to select a famous author *Liu Zongyuan* as an example, and conducted empirical research on the differences of the character, authenticity of works, calligraphy etc. In this assignment I tried to present a study model based on stone carving materials.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国文学、唐代、石刻、柳宗元、永州、柳州

1. 研究開始当初の背景

唐代文学において詩では李白・杜甫を、文では韓愈・柳宗元を代表とするのが宋代以来の評価であり、研究の基礎であるテキスト研究についても今日すでに完成の域に達しているかに見える。しかしこれまでの研究は主

に国内外に伝存する宋・明の諸版本や『文苑英華』・『唐文粹』等総集を中心として行なうものであった。柳宗元についていえば、千頁にも及ぶ呉文治『柳宗元詩文十九種善本異文匯録』（黄山書社 2004 年）が今日の集大成であり、テキスト研究の到達点を示しているが、

それには石刻資料が全く使用されていない。また近年、『全唐文新編』・『全唐詩補編』・『全唐文補編』等が刊行され、石刻資料を積極的に用いて拾遺・補正してはいるが、その多くは墓誌・碑碣の類であって摩崖石刻の類の収集と活用が不十分であり、かつ誤りも多い。

歐陽修以来、石刻は確かに第一次資料として研究者に重用されているが、その扱いには慎重でなければならない。石刻は千年の星霜を経ており、多くが復元作業を必要とする。今日の学者が石刻と称して用いている所は大半が『金石萃編』・『金石補正』等清代の集成、また最近出土のものであってもすでに釈文・判読されて抄録・刊行されたものの影印本あるいは排印された活字本であるが、そもそも石刻資料を一律に第一次資料と見做すのは誤りであって、石刻の実物こそが第一次資料であり、さらに言えば、石刻の拓本・写真本等も第二次資料であり、拓本等に拠っている録本は第三次資料なのである。いわゆる石刻資料は石刻・拓本・録本の三種に分けられ、凡そ石刻に拠ることを誇る今日の研究は、多くが第三次資料『石刻』録本を用いたものであり、真の一次資料による研究の方途を開拓する必要がある。

2. 研究の目的

柳宗元は李白・杜甫・韓愈と共に唐代を代表する大作家であり、韓愈と併称される古文家として、李・杜等の詩人と比べて石刻で残された作品が多い。唐代文学の石本による研究は、韓愈において劉真倫『韓文石本考(上・下)』長文2篇(『唐研究』(北京大学出版、七巻2001年、八巻2002年)があり、一定の成果が示されているが、一次資料に拠っていないこともあってなお誤りが多く、いっぽう柳宗元についてはまだ本格的に着手した者がいない。それは研究するに値しないからではなく、資料の存在が知られていないこと、本格的な調査・収集が行われていないこと、さらにそもそも研究方法自体が確立していないことに起因する。唐代文学において重要であり学界が未着手である柳宗元を対象とすることで柳宗元研究に新しい局面を開くとともに、石刻資料による唐代研究に一つのモデルを示す。

本研究は従来の文学研究における書齋型研究法を脱して文化人類学・考古学的手法であるフィールドワーク・実地調査、さらに測

量・デジタル化画像処理等の理系の手法を融合させ、PCを駆使することによって、文学・史学・芸術等多分野に及ぶ研究を可能とすると同時に、石刻を採拓しない、つまり貴重な文化財に直接触れることなく多くの必要なデータを収集できるために、文物保護の観点から見ても極めて有益である。本研究によって国宝級文物を発見する可能性もあり、また歴史的価値の根拠を提供することも期待される。

3. 研究の方法

(1) 石刻著録資料による基礎研究：大きく二種類に分れる。一つは『集古録』・『金石録』・『輿地碑記』・『天下金石志』・『金石彙目分編』等、現存とその地・作者・作時等を記録した類であり、一つは『金石萃編』・『金石補正』・『金石苑』等、さらに録文を加えた類である。

(2) 歴史地理書による補足研究：『寰宇通志』・『一統志』や『永州府志』・『零陵縣志』等々歴代の方志等には、当地における石刻の存佚の状態や具体的な存在地が記載されており、中には録文を備えるものがある。また実地調査等の地点の特定にも必須である。

以上の記録の中から柳宗元に関するものを収集・解読・整理・分類していく。

(3) 近年出土した、また発見された新資料の研究：「墓誌」の他に、近年公開された作品があるが、『柳集』に見えないものもあり、その真偽や模刻について鑑定が必要である。現存石刻については可能な限り実地調査を行う。

(4) 実地調査とフィールドワークによる特定地域型石刻研究から特定作家研究への応用：石刻資料が版本・抄本等に比して極めて信頼性が高いことは言を待たないが、所謂石刻資料は、石刻の実物、その拓本、その録本に分けるべきであり、従来と異なる最大の特色は実物による検証にある。それには実地調査とフィールドワークが必要である。桂林は石刻の集中地であり、現地を赴いて地域中心型の石刻研究を展開してきた。その成果はすでに二冊の書を刊行して公開しているが、今回はその方法を特定作家について適用を試みる。

(5) 文理融合型研究による展開：従来の文献資料に加えて、現地調査によって発見・収集された石刻等新資料を基礎データとする。

後者はデジタルカメラ・デジタルビデオで撮影・収録し、パソコンによって画像データ化した上で処理（解析・変形・合成等）を加えて使用する。この手法の利点は唐宋の石刻が貴重な資料であるにも関わらず勝手に採拓できない文化財であるという現実問題に対処できるだけでなく、実は比較的簡単にしてかつ拓本のようなモノクロ画像よりも情報量が多く、復元作業を含む加工も容易である点にある。また、筆跡・書法の特徴による真偽の鑑定にも不可欠である。

『柳集』宋代諸版本と以上の石刻諸資料と方法に拠って異文の校勘、佚文の真偽等の問題について究明する。

4. 研究成果

(1) 総数と分類

先の方法によって、柳宗元の撰あるいは書として著録されている、あるいは可能性ありとする説のある石刻 98 点（韓愈作「墓誌」等を含む）を得た。それらは時期と真偽等内容によって次のように分類される。

①長安時代：01 慈恩寺雁塔進士題名、02 慈恩寺雁塔同登題名、03 唐故殿中侍御史柳公墓表、04 唐故萬年縣丞柳君墓誌銘并序、05 終南山祠堂碑并序、06 太白山祠堂碑并序、07 唐故吳郡陸氏夫人墓誌、08 唐壽州安豐孝門銘并壽州刺史表、09 唐國子司業陽城遺愛碣、10 唐故趙郡李夫人墓誌銘、11 唐故京兆府參軍裴君夫人柳氏墓誌、12 唐故温縣主簿韓君墓誌銘、13 唐故渭南縣尉陳君夫人柳氏權厝誌、14 唐整屋縣新食堂記、15 唐故祕書省校書郎獨孤君墓志及墓碣、16 唐故兵部郎中楊君墓碣、17 唐故弘農令柳府君墳前石表辭、18 興州江運記、19 箕子廟碑陰、20 唐故潞州兵曹柳君墓誌。

②永州時代：21 唐故太子校書覃季子墓銘、22 劍門銘并序、23 永州龍興寺修淨土院記、24 唐故和州刺史凌君準權厝誌、25 唐故河東縣太君歸附誌、26 唐先侍御史府君神道表、27 唐先侍御史府君石表陰先友記、28 唐故特進贈開府儀同三司揚州大都督南府君睢陽廟碑并、29 遊南亭夜還敘志七十韻、30 唐故般舟和尚碑第二碑、31 全義縣復北門記、32 唐相國房公銘之陰、33 永州法華寺新作西亭記、34 始得西山宴遊記、35 鈞錫潭記、36 鈞錫潭西小丘記、37 至小丘西小石潭記、38 遊朝陽巖遂登西亭二十韻、39 漁翁、40 八愚詩并序、41 唐故太府李卿外婦馬淑誌、42 永州刺史崔公墓誌銘、43 唐故南嶽彌陀和尚碑、44 唐故南嶽雲峰和尚塔銘、45 唐故安南經略招討處置等使張公墓誌銘并序、46 唐故邕管招討副使兼貴州刺史鄧君墓誌銘并序、47 唐故永州刺史崔君權厝誌、48 永州新堂記、49 道州斥鼻亭神記、50 袁家渴記、51 石渠記、52 石澗記、53

小石城山記、54 武岡銘并序、55 與元饒州書、56 唐故衡山大明寺律和尚碑、59 唐故處士段弘古墓誌墓誌并序、58 唐道州文宣王廟碑、59 湘源二妃廟碑、60 永州萬石亭記、61 唐故衡山中院大律師塔銘、62 唐故岳州聖安寺無姓和尚碑及碑陰、63 零陵三亭記、64 遊石角過小嶺至長鳥村、65 柳巖題刻。

③柳州時代：66 柳州山水近治可游者記、67 先聖文宣王柳州廟碑、68 柳州城西北隅種甘樹、69 曹溪第六祖賜諡大鑿禪師碑、70 唐嶺南節度饗軍堂記、71 井銘并序、72 柳州東亭記、73 柳州重復大雲寺記、74 唐故寧郭師墓、75 唐故襄陽丞趙君墓誌銘并序、76 唐朗州員外司戶薛君妻崔氏墓志、77 唐故萬年令裴府君墓碣、78 唐故邕管經略招討使李公墓誌、79 訾家洲亭記、80 唐故處士裴君墓誌銘、81 唐故祕書郎姜君墓誌銘、82 乾明寺碑、83 錦秋亭碑。

④偽刻・誤伝：84 花石巖詩、85 馬退山茅亭記、86 唐故清河張府君墓誌銘、87 鈞錫潭題字、88 題鈞錫潭詩、89 浯溪記、90 龍城柳、91 唐故饒娥碑、92 九疑山賦。

⑤その他：93 柳宗直等華嚴巖題名、94 韓愈「柳州羅池廟碑」、95 韓愈「柳子厚墓誌銘」、96 韓愈「柳宗元墓碑」、97 孫璧「柳宗元石刻遺像」、98 李某「柳宗元石刻遺像」。

柳宗元関係石刻を著録する歴代の書約 100 種中では『金石彙目分編』が 67 点に及んで最も多いが、『柳集』や方志等それ以前の文献記録に拠ったに過ぎない。多く「待訪」に入れているのもそのためである。また方志の類は前代の記載を襲用することが多く、当時における現存については大いに疑問である。

これらの内、文化大革命期まで現存していたものも少なくなかったが、今日ではその殆どが破壊され、あるいは喪失している。石刻の現存が確認されたものは 15・38・39・67・76・87・88・90・97・98、拓本が現存するものは 34~37・50~53・69・92・93・94 である。計 20 点を越える数量は唐代の他の著名詩人文士に比べて極めて多いといえるが、実際には偽刻・摸刻がその大半を占める。

(2) 摸刻・重刻

34~37・50~53 は名作「永州八記」であるが、清以來說かれたように真蹟でも摸刻でもなく、南宋において蜀・簡州西郊に初唐の書家歐陽詢の書法をまねて重刻されたものである。しかし当時の無注白文本に拠っている点において極めて貴重である。蜀地にありながら南宋の詁訓本・百家注本など蜀本二系統とも異なり、むしろ建本である音辯本との関係が最も深く、范氏三〇卷本（佚）の系統に属するものと推測される。

38 は清代より諸説があり、明の蕭幹、明の朱文甫とされ、また最近では清の朱亥（字は補山）とする説もあるが、現地調査と画像処理によれば、小字の落款があり、明の朱亥（字

は子文)による正徳十六年(1521)の書刻であると認められる。その所拠本は南宋永州三〇巻本を反映している可能性もある。

39も著名な詩であるが、諸集本には見えない異文があり、落款に「唐柳八愚題明愚復重模」とあることによって明の愚復による摸刻であると推測されるが、当地朝陽巖の石刻を丹念に調査し記録している宗霈『〔嘉慶〕零志補零・石刻』、宗績辰『金石審』(宗績辰等『〔道光〕永州府志・金石略』)には見えず、『〔光緒〕零陵縣志』に至って収録されている点は不可解である。永州の愚復については未詳。異文には誤記の疑いあり。また、草書体が用いられており、かつ「重模」というが、「声」・「頭」が俗字が用いられている点は唐人の摸刻であることを疑いしめる。

67は元初・至元二十六年(1289)に重刻された「柳州路文宣王廟碑」であるが、当地に伝存した唐代の原碑に拠ったものであり、極めて高い価値を有する。多くの文字が校勘可能であり、また下半には97柳宗元肖像を重刻している点においても貴重な歴史文物である。

69は明・嘉靖二十四年(1545)陳大倫による重刻。

(3) 偽刻・誤伝

85・86・91が誤って柳の作であると伝えられ、『柳集』に編入されたものであることは早くから説があり、吳文治『柳宗元(4)』の「辯偽雜録」にも紹介されているが、この他に定説のないものや新発見のものがある

87・88:永州愚溪に現存しており、「鉅罍潭記」にいう潭北岸の巨石に刻されているために当地では清代より柳宗元作で佚詩にして真蹟あるいは摸刻とされ、また金石学者陸增祥は北宋・元祐八年(1093)邢恕の作とし、最近では明・正徳八年(1513)曹來旬の作とする説も出ているが、現地調査と画像処理によって落款に「過永州」と釈読される文字があることが判明した。したがって永州司馬であった柳宗元は固より、永州監倉の邢恕、永州知府の曹來旬の作であることもあり得ない。

90:柳州柳侯祠に重刻が現存しており、多くの博物館等に清拓も所蔵されている。「元和十二年柳宗元」の自署が刻されていることによって早くから真蹟と考えられて来たが、銘文は北宋に柳宗元に仮託された偽書『龍城録』の一条に拠って偽造されたものであり、明代の弘治年間作の詩にその拓本が流布していたことを詠んだ句があることによってそれ以前の成立であり、また明代初期に柳宗元に関する碑石が靈異を重ねて示し、神格化されたことによって、この間に偽造されたものと推測される。民間の英雄柳毅説話と結び付き、護符として採拓されて清代には広西から湖南、さらに江南まで流布し、太平天国の乱の平定でも一役をかったことは殆ど知ら

れていない。

92:近年、「柳公權書」と署名する拓本が発見されて真偽をめぐって論争が始まり、さらにその撰文者を柳宗元とする仮説が提示されたが、内容・修辭法および明初の方志等の記載によって、南宋末の道州寧遠県人黄表卿の作であると判断される。賦題にいう九疑山は寧遠にある。したがって宗元の作ではなく、また公權の書でもあり得ない。

84は『〔雍正〕廣西通志』に「柳子厚曾遊此」といい、また詩は『〔道光〕灌陽縣志』に収録するが、作者柳宗元は零陵県内に軟禁状態にあつて灌陽県に遊ぶことはあり得ない。この他、灌陽県には愚溪・柳子巖と呼ばれる遺蹟があり、これらは「愚溪詩序」に「灌水之陽、有溪焉、東流入于瀟水」とある地理が誤って伝承されたことによる。東に隣接する全州に愚溪にあるべき鉅罍潭が伝承されているのも同様であり、誤った地理理解による。早くは『〔嘉靖〕廣西通志』に収める南宋・吳曾の「記」という佚文に始まる。

89は『太平寰宇記補闕』(嘉慶八年1803)に見えて岑仲勉『唐集質疑』が「殆誤記元結『浯溪銘』也」としてその誤りを指摘するが、『方輿勝覽』の記事を誤記したものである。

(4) 佚文・佚詩

したがって佚文・佚詩と考えられていたものは大半が偽刻・誤伝として排除すべきものであるが、中には佚文・佚詩の可能性の高いものがあつた。54には伝世諸集本には銘文の押韻の関係から見て脱落している句があるのは明らかであるが、『大明一統志』の節録する所によって拾遺することができる。内容は序に符合し、韻も合致している。当時現存していた石刻によって伝わったものを踏襲していると思われる。また、諸集本に収載されていないものとして「憶全正上人」・「送叔平學士知青州」・「遣懷」・「吐谷渾詞」・「綠珠井」等の詩を拾遺することができる。いずれも吳文治「辯偽雜録」にも取り上げられていない。前三首は全文が伝わっている。前二首は明代方志に載っており、中でも前一首は当地華巖巖の僧侶を詠んだものであり、当時もその地の石刻群はほぼ完璧な形で存在していたから、それによって録されて伝わっていた可能性も考えられる。

(5) 異文・校勘

現存石刻やその拓本あるいは本来それによって録文されたと考えられる資料との対校を通して大量の異文の存在が知られ、校勘することができる。いくつかの作について、詳細な対校や考証の過程は既載論文に譲る。

現存石刻の中で最も信頼性の高いものが最近出土した15(1999年)・76(1987年)である。

15の復元によって以下のことが知られる。
①事跡の補正。集本では省略されている「承

務郎行京兆府藍田縣尉柳宗元纂」と文中の「葬於貞元十八年」「李行純元固」「韋詞默用」等によって両『唐書』・「墓誌」・諸年譜に見える事跡・交友関係・官歴等に関する記載を補正することができる。②唐代地理の補正。集本では「集本均作“郷曰某郷，原曰某原」の定式で省略されているが、石刻には「葬萬年縣鳳栖原義善郷」と具体的地点が補填されており、これによって唐代万年県の郷・原の地理関係を知ることができると同時に集本にいう柳家先墓の地「棲鳳」が「鳳栖」の誤りであることを知る。③墓誌と墓碑の関係。集本は「獨孤君墓碣」に作り、出土したものは「獨孤君墓志」になっているが、内容は殆ど同じであり、また韓愈作に「韋丹墓誌」と「韋丹墓碑」があり、さらに、集本には「柳子厚墓誌」を収めるが、元の『類編長安志』には「柳宗元碑」に作って「在鳳栖原墓前，碑碎」と記録する。墓誌は墓中つまり地中に、墓碑・墓碣は墓側つまり地上にあつて場所を異にしており、墓誌の類は人目に触れることがない。柳宗元には墓誌だけでなく、墓碑もあり、「獨孤君墓碣」と「獨孤君墓志」が同じ内容であることによって、当時一般に墓誌・墓碑が同文であつた、つまり転用可能であつたことが知られる。このことは韓・柳に限らず、唐代一般に墓誌・墓碑を考える上で重要な事象である。④撰書の関係。墓誌等の撰と書は、～撰、～撰并書、～撰～書の形式に分けられ、単に「～撰」とある場合には「撰并書」であることが多い。これは後述する柳宗元真蹟の存在に直接関係する。

76 の復元によって以下のことが知られる。①柳宗元の姻戚関係。集本は墓主の名を「崔媛」に作り、さらに明の『書史會要』も崔媛として中国書道史に加えるが、石刻では「諱蹈規字履恒」に作る。集本は本来「某」になっていたものを後人が補填したものであり、それは後漢の女性書家崔瑗との混同によるのではなからうか。集本の「某官鯢」は石刻では「太常寺大樂丞鯢」に、「中書令仁師」は「中書侍郎平章仁師」を作られている等、この類の補正箇所は多い。②俗語表現。「巽之他姫子：丈夫子曰老老，女子子曰張婆。妻之子：女子子曰陔羅尼，丈夫子曰那羅延」の「女子子」を集本は「女子」に作り、この出土墓誌を釈読した『唐代墓誌彙編』に至っても「女子」に作るが、いずれも誤り。「女子子」は「丈夫子」男の子に対する呼称。柳文に習見しており、集本が「大丈夫」と対している例で「女子」に作るものは本来「女子子」であつたと考えられる。③仏教崇信の家系。柳宗元の母が信仏であつたこと、宗元の子が尼となつたことは他の作中に明記されているが、宗元の姉も篤信家であつたことが陔羅尼(dhaaranii)・那羅延(Narayana)の命名から知られる。集本は「某」に作る。当

時の風俗を知る史料でもある。

(6) 真蹟・書法

石刻の多くは真蹟を伝えるものであり、90 は「元和十二年柳宗元」という自署があること、銘文に韓愈「墓誌」との類似点があることによって真蹟と考えられてきたが、すでに石刻そのものが偽造であり、真蹟ではありえない。また、現存する 38・39・88 も後人による重刻であり、しかも摸刻の可能性は極めて低い。その中、唯一真蹟を反映している可能性の高いものが近年出土した 15・76 である。その根拠は、①「～撰」の表記。実際には「撰并書」である例が多い。②書法の類似。「柳宗元撰」である 15・76 の書風が全体的に見て似ていることは、76 と同時に出土した崔雍撰「薛君(巽)墓誌銘」と比較して一目瞭然である。崔雍は崔蹈規の弟。③署名の筆跡の酷似。とりわけ「柳」字は 15・76 共に異体字「柳」を用いており、しかも「木」偏を撥ねて「」とする筆致に特徴がある。現存墓誌によれば唐代では両字が通行しており、伝存する柳公権の書でも「柳」字が用いられているが、撥ねることはない。④柳宗直の書法との関係。遼寧博物館に蔵する東晋昇平二年(358)「曹娥碑」に柳宗直による題記があり、「柳宗」は「柳」・「」に至るまで酷似する。宗直は宗元の従弟であり、永州・柳州に同行していた。宗元は墓誌でその書法を「得師法甚備」と讃えている。元和間にあつて宗元の書法はすでに著名であり、日本には三筆の一人橘逸勢への師資相承を記録する史料もある。⑤すでにこのような書家であれば、宗直は宗元に書法を学んでいるはずであり、宗元撰文の 15・76 もただその内容だけでなく、書に至ってもその原稿に依つたと考えるのが自然である。

(7) 肖像

97・98 は、絵画を含む、今日に伝わる柳宗元の肖像として最も古く、しかも石刻のそれである。それは唐宋間に最期の地柳州の民間に伝わる絵画を元祐七年(1092)に摸写して羅池廟内に納め、政治三年(1113)に刻石して羅池亭内に立てられて伝わって来た系統に属する。石碑は南宋末に蒙古軍の南下によって破壊され、柳州附郭馬平県から西北の柳城県に廟・墳墓を移した際に重刻された。97 は至元二六年(1289)に新廟に、98 は三〇年に旧廟に置かれ、原画は本来同一であるはずであるが、両肖像には若干の相違が見られる。97の方がより古く、かつ同じく馬平県にあつた 67 と共に刻石されている点から宋代の原刻により近いものと考えられる。

97 は後に遷されて、98 とともに柳侯祠内に置かれているが、ほんらい柳城県にあつたものであることを知る者は少ない。これらの肖像石刻は今日までほとんど研究されることがなかったが、極めて貴重な資料であり、

また国宝級の歴史文化財でもある。柳侯祠にはこのような歴史的価値の認識に立っての保護と管理を提言したい。

以上、石刻は異文の校勘に止まらず、事跡・家系・交友等の補正、さらに書法・肖像等に至るまで広範囲の研究に資する、かつ極めて信頼性の高い史料であり、一次資料たる現存石刻の調査と復元に拠る研究は不可欠であるのみならず、経済優先で開発の進む現中国にあっては喫緊の課題でもある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 14 件)

①戸崎哲彦、永州朝陽巖現存柳宗元詩刻與明人朱袞、湖南科技学院学報、査読有、2011、掲載決定

②戸崎哲彦、傳柳宗元手書「龍城石刻」辨偽一神となった柳宗元、島大言語文化、査読無、30 号、2011、1～41

③戸崎哲彦、中国柳州市柳侯祠蔵柳宗元石刻遺像考、彦根論叢、査読無、386 号、2010、42～65

④戸崎哲彦、簡州石刻柳宗元「永州八記」再考—その底本と宋代蜀本「柳集」の系統、島大言語文化、査読無、29 号、2010、1～58

⑤戸崎哲彦、柳公權書「九疑山賦」拓本辨偽、湖南科技学院学報、査読有、総 156 期、2010、15～22

⑥戸崎哲彦、柳宗元父及叔父名諱辨疑—兼考所謂“吳”地、柳宗元研究、査読有、総 13 期、2010、117～132

⑦戸崎哲彦、柳宗元「道州毀鼻亭神記」考、柳州師專学報、査読有、総 86 期、2010、19～29

⑧戸崎哲彦、唐代京兆府萬年縣郷里補考、中国歴史地理論叢、査読有、25 卷-2 期、2010、46～55

⑨戸崎哲彦、柳宗元塋地“萬年縣少陵原、實棲鳳原”考釋(下)、島大言語文化、査読無、28 号、2010、1～48

⑩戸崎哲彦、柳宗元塋地“萬年縣少陵原、實棲鳳原”考釋(上)、島大言語文化、査読無、27 号、2009、1～45

⑪戸崎哲彦、白居易「醉吟先生墓誌」の自撰と碑刻、日本中国学会報、査読有、61 集、2009、74～89

⑫戸崎哲彦、廣西所見『全宋詩』失收佚詩、文史、査読有、総 87 輯、2009、183～216

⑬戸崎哲彦、宋代桂林における韓愈「送桂州嚴大夫」詩、島大言語文化、査読無、26 号、2009、1～42

⑭戸崎哲彦、韓愈撰「柳州羅池廟碑」之謎團、柳宗元研究、査読有、総 11 期、2008、96～106

〔学会発表〕(計 4 件)

①戸崎哲彦、桂林乳洞巖唐代石刻考、唐代文学国際学術研討会、2010 年 10 月 17 日、中国天津市・南開大学

②戸崎哲彦、簡州石刻柳宗元「永州八記」尋根考、柳宗元国際学術研討会、2010 年 10 月 13 日、中国永州市・湖南科技学院

③戸崎哲彦、柳宗元墓地“萬年縣少陵原、實棲鳳原”之謎、柳州柳宗元学会、中国柳州市・柳州博物館、2009 年 9 月 25 日

④戸崎哲彦、韓愈「送桂州大夫」詩在宋代桂林、韓愈国際学術研討会、中国孟州市・市人民政府、2008 年 11 月 2 日

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計◇件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

戸崎 哲彦 (TOSAKI TETSUHIKO)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：40183876

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：